

1. はじめに

岩瀬の街に居ると、北陸街道期の伝統を受け継いで後世に益々磨きがかかった伝統的躍動を感じる。ならばそんな躍動感覚でもって、街道や街並みの文化を歴史鑑賞としたくもなる。そこで、文化の俯瞰とまではいかななくても、街道の街空間がおりなすドラマチックストーリーを江戸期から現代につながる歴史として展望することにした。具体的には、岩瀬の繁栄の歴史や建造物等を含めて街の再生と現代的創生にスポットを当て、伝統と芸術によるコミュニティとしての街について論評することにした。

2. 街道の鑑賞には

本稿では、建築歴史を研究するのではなく、街道を基軸にして富山県内の歴史風情を鑑賞することになり、感覚的な事象をもってストーリーを組むことにする。

(1)街の風情： 多くの宿場では建物に関する遺構が残っていないので、当時を周りの街環境から類推することになる。街環境が風情ある歴史的環境であれば歴史的類推も楽しいが、ビルに囲まれたところでは味も素っ気も無いのが正直なところである。

それでも、街にて何かを見だし歴史を感じたいものであるが、ではその何かとはを考えてみると、それは街そのものや生活とそのものがつくる形や臭い等の雰囲気である。これは建造物群、道路(街路)、木立、石碑・石仏等により醸し出されている。

そんな思いを念頭に各宿場を巡ると、富山や高岡の都市域では、ビルが林立し、目印となる跡地案内看板が唯一物語っているだけである。これに対して田舎域は、たとえ古い家が無くても新しい家の街であっても、街道という道路が程よく空間を作り上げ、歴史的な雰囲気を感ずることが出来る。

(2)街道： 街道の道はどのようにしてつくられているのか興味があり、いつかは纏めたいと思っている。さしあたりここでは、旧道が結構保存されている(というよりもメイン道路が別に作られたおかげで旧道が残った)ことに安堵したい。

まずは、街道の形状から。街道は、水田域では水路の関係で等高線とは平行であり、最大傾斜でクロ

スすることが多い。また街中の街道では、それこそ揺らぎのある曲がり具合が絶妙である。そんな街道に色を添えるのは、道標や石碑・石仏、周辺の森や田畑である。興味が深まる。

(3)歴史の継続： 現代では街道風景が様になりにくいのはなぜか。街道(生活道路そのもの)が生活の場になっていないことで、生活の様相が外にこぼれ難くなっているからではなかろうか。こう考えると、老若(新古)建物の混在が生活の場を際立たせるかのように働き、文化的風景が今もお息づかせることになろう。過去の何かしらの伝統を受け継いだ街とはそのようなものなのである。

このようにして、街道期から現代まで歴史的変遷を文化の次元で追いかけることができる。この要件を満たしてくれる宿場が岩瀬であり、岩瀬限定の理由はまさにそれである。

3. 岩瀬の歴史

岩瀬は室町時代から北国廻船の重要な湊であり、江戸期に入っては加賀藩のコメ積み出し湊として大いに賑わっていた。そのころから、岩瀬の五大家(宮城家、馬場家、米田家、森家、畠山家)が栄えていた。

明治6年(1873)には、街の半分以上が焼ける大火災があり、江戸期の建物はほとんど焼失した。その後、街衆の努力により、東岩瀬廻船問屋型の家屋や土蔵造り型の家屋で街が再建された。

時代が下り、富山新港ができるなどの近代化が図られる一方では、岩瀬でも過疎化が進み、かつての建築も空き家になってきた。これを憂いた地元の名士が2001年頃から空き家の買取りに着手し、2004年に「岩瀬まちづくり」の会社を立ち上げ、以降、街の再生・保全とともに若手芸術家の拠点づくりにも励み、結果、伝統建造物の街や創造性創出の街としてのコミュニティが熟成し今日に至っている。

4. 岩瀬の繁栄、

4.1 交易、北前廻船

岩瀬は日本海側の交易の拠点として加賀藩のコメ積み出し湊として、藩米が大坂まで運ばれていた。

明治期に入ると、北海道まで交易路が拡大し、当

時の廻船問屋の森家や馬場家などが中心に街の繁栄は頂点に達していた。

ところで、読者の皆さんには、なぜ江戸時代には北海道と交易がなかったのか、極論として江戸時代には日本海側の航路はなかったのか、と疑問をもたれることが多々あるかと。

実は、日本海側交易路は、縄文期からすでにあつたとされており、江戸期には西国はいうに及ばず東北まで盛んであった。北海道へと航路が伸びたのは、明治になってから、北海道開拓民として多くの内地人が北海道にわたり、その方々の食料としてのコメの確保が急務であった。当時、北海道ではコメが採れなかったので、コメどころ北陸から北海道にコメを運んでいたのである。



では、なぜ主に富山米が北海道に渡ったか。理由は、富山米がまずいコメであり、内地では売れず、北海道にもっていったという。これが、富山を大正米騒動発祥の地の要因の一つとなっている。

4.2 富山の薬

なぜ薬は富山か。これを可能にしたのが日本海側航路である。交易として、越中米が薩摩藩にわたり、薩摩藩から清国産薬剤が富山に入ってきたのである。

ではなぜ藩が率先して交易か。理由については、富山藩が加賀本藩から分藩したとき、石高に不相応な数の藩士を本家から押しつけられ、そのため藩財政が大混乱した。薬売りはそのときの窮余の策とも



写真1 佐藤家；上から下に順に、古写真、着工前、側面竣工

写真2 米田家；上から下に順に、大隈閣下休息所古写真、着工前(ブロック壁)、側面竣工

いう。もちろん、富山の薬売りは藩の産業振興という通説もある。

5. 近代の岩瀬

岩瀬の文化的現代化として、街並み再生から創造的コミュニティ創出までを対象に、明治期の街並再生と共に芸術を核に若者を呼び込む現代的創生が実施され、歴史的な風情ある文化継承の街が実現した。

5.1 近代の富山

岩瀬の近代を富山全体としてまずは捉えたい。富山は農業を基本として、明治期以降、肥料や農機具の工業化が盛んになり、農、工、商がバランスよく発展したといわれている。これに対して他県での発展は、どちらかという工業中心あるいは商業中心といった偏りをみせており、富山の場合とは様相は大きく異なっている。

5.2 街の再生

当時の街並みに戻すことを目的として、街づくりは二段階で進められた。ひとつは建築単体の再生であり、次いで二つは街全体の再生である。

5.2.1 森家土蔵群の修復再生工事

森家土蔵群の修復再生工事は2004年に職芸学院の上野氏の主導のもと行われた。4棟あった古い土蔵を壊し、これに代わる大きな土蔵1棟をつくった。蔵の外壁には竹材使用など、工夫があちこちでみられる。

5.2.2 街並み保全事業

事業着手以前の街では建物ファザードや電線・電柱が雑然としていたために景観・風情が損なわれ気味であった。そんな街について、改善事業は街道そのものと建物ファザードの二面から着手となった。

第一には、看板や自販機が撤去され、落ち着いた木の側壁がつけられた(写真1)。また、背の高いブロック塀で囲まれた家については、ブロック塀が撤去され、木の外壁が設けられた(写真2)。

(写真1：佐藤釣具店、2009年4月着工、11月竣工)

(写真2：米田家、2005年着工、2006年4月竣工)

第二には、街道の風情を取り戻すために、石畳の敷設や電線の地中化などにより、街道は落ち着いた雰囲気となった。

これらの改善をもって、街が文化的な風情を取り戻した。

5.3 創造的コミュニティづくり

街のコミュニティづくりとして、ソフト面からの取り組みを述べる。

- ・岩瀬へのアクセスについては、2006年4月にライトレールが駅北から岩瀬までを結び、岩瀬の街がぜん活気づいた。

- ・森家土蔵群を芸術の拠点とした。蔵には、表通りに面して酒屋が、奥には蕎麦屋、さらに奥には陶芸やガラス工芸などの工房がそれぞれ陣取り賑わっている。

- ・街では、伝統的家屋の既住民と職人や芸術家の移住人により、伝統と創造を重んじるコミュニティがほどよく形成されている。

5.4 建物修理事例

現存する明治期の家屋に関する修復は、前述のとおり2004年から作業に入り、2010年頃にひと段落している。昨年からは、岩瀬随一大きな家屋(馬場家)の修復の検討が始まり、比較的新しい時期に造作された天井を剥がしたところ、貫をみせない立派な枠の内の構造体が現れ、軽快さと荘厳とを醸し出していたという。

6. おわりに

岩瀬に限定して街の風情を歴史として鑑賞した。岩瀬では、江戸期をも含めて明治からの伝統が受け継がれており、その結果街の息遣いが伝統色豊かに感じられる。そんな雰囲気醸し出すのはコミュニティのおかげであり、ここに歴史の現代的継承発展を感じた次第である。

◆ **いかがでしたでしょう** 本稿での話題は、東岩瀬宿の街に根付いた生活模様です。これにより、北陸街道が大いに彩られたかと思っております。そんなことでの岩瀬での一服、いかがでしたでしょうか。

謝辞：職藝学院の上野幸男教授には写真や情報の提供をいただきました。記して謝意を表します。